國學院大學学術情報リポジトリ

『経世博議』解題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 靖二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000553

『経世博議』解題

星野　靖二

1．はじめに

本解題では、1890年代初頭に、中西牛郎［1859～1930］を主筆として京都で発行された雑誌『経世博議』について、その内容を検討し、同時代的文脈に位置付けることを試みる。先回りして同誌の内容的な特徴について述べておくと、政論と宗教論が共に載せられているという点があり、後述するようにそれは当時の中西の人脈を反映するのものとして考えることができる。

なお、本誌を取り上げる主たる理由は、やはり中西牛郎という人物[1]との関連による。中西については、その著作『宗教革命論』（1889）などにおける「新仏教」の議論が、明治中期以降の仏教改良運動の展開に一定以上の影響を与えたという評が近年なされるようになったが、基礎的な研究についてはまだ不十分なところがあり、本研究もその一環としてある[2]。なお、中西の宗教論・仏教論については、これまでに論じてきたところでもあるので[3]、本解題は『経世博議』の宗教論・仏教論以外の側面にやや重点を置いていることを最初に述べておく。

2．『経世博議』について

『経世博議』の発行期間について、1890（明治23）年11月20日に創刊号が出されており、現在1892（明治25）年12月21日に発行された24号まで確認できている。24号が出た翌月にあたる1893（明治26）年１月27日に『停会何故乎』という題の冊子が『経世博議』の号外として出されているが、これは第二次伊藤博文内閣下で行われた第４回帝国議会中における停会について論じる政論である。後述するように、この号外には『経世博議』本誌の広告が掲載されており、継続して刊行する意図があったことが想定されるが、25号以降の刊行を確認できていないため、現時点では24号を最終号としておく。

2.1. 発行の趣旨

まず創刊号と第二号の巻頭に掲げられた「経世博議の理想」という趣旨文を見ながら、同誌がどのようなものとして構想されたのかを確認しておきたい。

> 此狂瀾天を捲き、鯤鯢［コンゲイ］鬣［タテガミ］を振って、脆弱なる艦隊将さに覆没せんとするの時運に際し、東洋に吾人形躯的の勢力を表彰するの一大国家と、吾人精神的の勢力を表彰するの一大教会とを建設せんとするは、是れ天、吾人に附与したるの使命なることを信じて疑はず、而して此国家は必ず万世一系の皇統を以て中心とし、外に対しては其統一を保ち、内に向っては其自由を活動せしめ、実力中に充実して、権威旭日の昇るが如くならんことを期し、此教会は必ず永遠不易の真理を以て基礎とし、慈悲と平和と純潔とを以て其機能とし、其殿堂は無極にして世界の各国民を容れ、其信仰は鉄如として山岳

をも移すべきことを期す[4]。

ここで「一大国家」と「一大教会」とを併記し、国家と教会を共に建設していこうとする姿勢が示されている。冒頭で触れたように、同誌は政治と宗教をめぐる議論を共に取り上げており、それが明確な意図に基づいて行われたことが窺われる。

また、その両者が他でもない「東洋」において建設されるべきこと、国家については「万世一系の皇統」に基づくものであるべきことが述べられているが、これについては中西が上京前に郷里熊本で深く関わっていた紫溟会との結び付きを考え合わせることができる。

2.1.1. 紫溟会との縁

『経世博議』に大きな影響を与えている中西と紫溟会の関わりについて少し補足しておく。

紫溟会は、佐々友房、古荘嘉門らが中心となって1881（明治14）年に熊本で設立した国権主義の団体であり、紫溟学会（1884年設立）を経て熊本国権党（1889年設立）へと展開していく。この紫溟会と関係の深い学校である済々黌（現:熊本県立済々黌高等学校）が1882（明治15）年に開校するが、その際に中西は発起人の一人となっており、開校式にて祝文を朗読し[5]、また皇漢学の教員となった。同時に、紫溟会の機関誌『紫溟雑誌』『紫溟新報』などにおいて、中西は津田静一と共に盛んに執筆活動を行っていた[6]。

なお、中西は1888（明治21）年頃まで基本的に熊本で活動していたことが想定されるが、その後浄土真宗本願寺派（以下本願寺派）の資金援助による米国滞在（1889（明治22）年６月～1890（明治23）年１月）を経て、1890（明治23）年10月に本願寺派の大学林文学寮の教頭兼教授として招かれ、以後基本的に京都で活動することになる。『経世博議』の創刊はその翌月の11月である。上京直前まで熊本で活動していたことを考え合わせるならば、京都での活動において熊本時代の人脈――紫溟会だけでなく後述するように熊本の仏教者との結び付きもあった――が影響しているのは、ある意味当然のこととともいえるだろう。

この紫溟会の性格について、結成時に掲げられた綱領は以下の三条であった：

一、皇室ヲ翼載シ、立憲ノ政体ヲ賛立シ、以テ国権ヲ拡張ス
二、教育を敦クシ人倫ヲ正シ、以テ社会ノ開明ヲ進ム
三、厚生ノ道ヲ勉メ、吾人ヲ全シ、以テ国家ノ富強ヲ図ル

第一として明確に述べられているように、紫溟会においては「皇室ヲ翼載」することがまず重視されており、その上で立憲政体と、また「国権ヲ拡張」することが強調されているのを見て取ることができる。

他方で、西洋への対抗という文脈において、東洋とその宗教に着目するという見解も紫溟会の刊行物において示されており[7]、これはまた紫溟会からアジア主義につながる流れがあったこと[8]と結びつけて考えることができるだろう。この「東洋」へのまなざしについて、『経世博議』においても単に趣旨文で言及するだけに留まっているわけではなく、創刊号の社説に「東洋の命運」という論説が掲載されているように、西洋の圧倒的な存在感と圧力を前提として、これにどのように対抗するかという問題意識に即して「東洋」が用いられており、かつ日本単独ではなく、「東洋」の連帯において西洋に対抗すべきであるとする視座が

示されているのである。

もちろん、その「東洋」の内部の多様性や自律性がどこまで認められていたのかという問題は別に問われるべきであり、その点においても紫溟会における、あるいはより広く近代日本におけるアジア主義と重なる面があるように思われる[9]。

2.2.『経世博議』に関わった人々

このように概観した上で、実際に『経世博議』に関わった人々について見ていきたい。

2.2.1. 主筆、中西牛郎と博議社

まず、全号通じて主筆は中西牛郎であった。社説の多くは無記名であるが、宗教一般、あるいは仏教、キリスト教、ユニテリアンなどを取り上げているものについては、おそらく中西の手になるものであろうと推察することができる。

他方、前述の号外（1893（明治26）年１月27日刊）の冒頭に『経世博議』本誌の広告が掲載されているが、そこでは以下のように述べられている：

> 本誌は久しく中西牛郎主筆の名を以て世に公にせしが其実同人多忙界中に首を埋め筆を操りて編輯の事を監督する能はず愛読諸君の値遇に負く実に多し今や同人の身路一転忽ち躍然として椽大の筆を揮ひ自から奮って編輯の事を監督し愈々主筆の名をして其実に副はしめんとす

ここで、中西が今後より実質的に『経世博議』に関わっていく旨が述べられている。この背景として、一つには、それ以前から同誌の経営状況が芳しくなかったことが窺われるため[10]、この号外における記述も購読者増・未払い代金支払いへの梃子入れとして提示された可能性がある。もう一つには、「今や同人の身路一転」とあることと関連して、中西は前年1892（明治25）年７月に文学寮の教頭の座を解職されるということがあり、そのため、より『経世博議』に専念するようになったという可能性もある。

この頃の中西について、号外に1892年11月に『大阪毎朝新聞』[11]の主筆として招かれたという記述があり、号外の表紙の中西牛郎の名前の上にも「経世博議　大阪毎朝新聞　主筆」と記されている。結果から見るとその後『経世博議』を離れて『大阪毎朝新聞』に専念したように見えるが、いずれにしても『経世博議』廃刊の経緯や、『大阪毎朝新聞』周辺についての事情など、依然として不明な点も多い。

なお、『経世博議』と京都の仏教界に結び付きが想定されるため、本願寺派を追われた中西に対して、以前ほど積極的な支援がなされなくなり、結果として廃刊となったという筋書きにも蓋然性があるが、これについても裏付けとなる資料が現時点では十分ではないことを付記しておく。

経世博議の発行所となったのは全号通じて博議社であったが、その所在地は転々としており、京都市上京区境町通夷川北（１～８号）から、下京区綾小路通烏丸東入（９号）、同区綾小路通烏丸東入竹屋之町（10～16号）、同区綾小路通烏丸西入童待者町（17～21号）、同区六角通烏丸東入拾四番戸（22～23号）、同区綾小路通室町西入善長寺町六番戸（24号）となっている。

発行兼編集人を務めたのは全号通じて岩尾昌弘であり、『経世博議』には記名社説を１編寄せている（岩尾昌弘「基督教反動の将に来らんとす」『経世博議』23号、1892（明治25）年11月20日）。印刷人については変遷があり、甲斐三郎（１～６号）、西勇治郎（７～８号）、湯瀬季知（９～21号）、大森幾治郎（22～24号）となっている。残念ながらこれらの人物の履歴については未詳である。

2.2.2.博議社の社員たち

博議社の社員について、本誌上に散見される記述をまとめると以下のようになる。

まず、６号では中西牛郎、松山緑陰、平野法梁、堀内静宇が社員であるとされている。松山緑陰（松太郎）は、本願寺派普通教校で英語教師を務めていた人物で、1888（明治21）年に海外宣教会[12]を組織して、仏教の海外伝道を試みていた。平野法梁は未詳であるが、創刊号に祝詞を寄せている。三河と関わりのあった人物で、おそらくは出版に携わっていたようである[13]。堀内静宇は、浄土宗と関わりのあった人物で、初期の『浄土教報』の主筆、また、後に『佛教』の記者を務めた。

続いて、1892（明治25）年１月21日に出された13号の新年挨拶では、中西牛郎、岩尾昌弘、湯瀬季知、志賀哲太郎が別枠でくくられ、これに堀内静宇、松村翠濤、辻治之、井手三郎、鳥井赫雄、豊後巍鏡が名を連ねている。

志賀哲太郎［1865～1924］は熊本出身で、中西の私塾神水義塾で学んだのち紫溟会に加わり、『紫溟新報』の後継紙である『九州日日新聞』の記者も務めた。この頃平井金三のオリエンタルホールで英学を学んでいたという。『経世博議』への寄稿はないが、中西と共に遊説したという記述がある。後、1896（明治29）年に台湾に渡って児童教育に従事し、現地で顕彰されているという。

松村翠濤は未詳。「在東京」とあるので寄稿を通じた関わりか。『経世博議』には「歴史上の謬見」（13、14、17号）を寄せているが、この頃『三宝叢誌』や『佛教』にも寄稿していたようである。

辻治之（＝辻治之助＝繍江居士）は未詳だが、後に『内地雑居尚早意見』（1893）を編集して、これが安達謙蔵を発行人として出されていたりすることなどから、熊本との関わりが想定される人物である。仏教界とのつながりはほぼ窺われない。『経世博議』には政論、美術、貿易など、宗教論ではない論説を９編寄せている。著書に『志士淑女之想海：日本帝国一大現象』（1888）、『日本経国正議』（1889）などがある。

井手三郎［1862～1931］（＝肥後山人）は熊本出身で済々黌を卒業しており、やはり紫溟会の人脈と結び付いていた人物である。仏教界との関わりはあまり見られないが、後述するように九州仏教倶楽部が設立された際に名前が出ている。『経世博議』に「対清意見」などを寄稿（後述）しているように、早くから中国語を学んで中国大陸に目を向けており、紫溟会とアジア主義との結び付きを体現している一人である。日清戦争の際に陸軍通訳となり、後福建省で漢字新聞の『閩［ビン］報』を、また上海で漢字新聞の『滬［コ］報』と日本語新聞の『上海日報』を出版した。1898（明治31）年に東亜同文会が創立された際に加わっている。後、帰熊して熊本県選出の衆議院議員になった。

鳥井赫雄［1867～1928］（＝鳥居素川）も熊本出身で済々黌を卒業しており、『経世博議』には「王陽明学」（16号）を寄稿している。日清戦争時に『日本』紙の従軍記者となり、そ

の後『大阪朝日新聞』紙などの記者として活躍することになる。

豊後巍鏡は未詳。『経世博議』への寄稿もない。

また、中西の五歳年下の実弟である松本熊四郎（＝鳥居雪田）[14]も、ごく短期間博議社社員として関わっていたようである。

このように、博議社の社員の中には、狭義の仏教者というよりは、むしろ紫溟会の人脈に結び付いていた熊本出身者が一定数いたことになる。京都にあった中西の周辺に、上京してきた紫溟会系の熊本人たちのまとまりがあったことを想定することができるが、これについては結論部でも触れる。

2.3. 祝詞を寄せた者たち

次に、1890年11月に出された『経世博議』創刊号に祝詞を寄せた人々の名前を見ておきたい。これらの人々は何らか同誌に期待を寄せた人々であり、どのような期待を寄せていたのかを見ることで、当時の同誌の位置付けを検討することができるだろう。

登場順に渥美契縁（真宗大谷派僧侶、以下大谷派）、藤島了穏（本願寺派僧侶）、堀内静宇（浄土宗）、小林端一（当時京都府商業高校校長）、服部宇之吉（中国哲学者。当時第三高等学校教員、後東京帝国大学教授）、前田慧雲（本願寺派僧侶）、平野法梁（未詳、博議社社員）、紅葉山人（未詳）、加藤恵証（本願寺派僧侶、熊本出身）、徳富猪一郎（蘇峰）（当時『国民之友』主宰者、熊本出身）となる。

10名中の半数が仏教者（渥美（大谷派）、藤島（本願寺派）、堀内（浄土宗）、前田（本願寺派）、加藤（本願寺派、熊本出身））であり、渥美のように教団内で大きな役割を果たしていた者もあった。やはり本願寺派との結び付きが強かったことが窺われるが、必ずしも同教派に限定されていたわけではなく、広く仏教界からの期待がかけられていたということができるだろう。

また、同郷の徳富とは思想的・政治的立場において相容れないものがあったと考えられるが[15]、徳富は簡単なものとはいえ祝詞を寄せている。中西が徳富らの周旋を受けて同志社において学んでいた時期があったこともあり、両者の交友関係が維持されていたことが窺われる。

これらの祝詞において強調されている点を二点挙げることができる。

第一に、（東京ではなく）京都から情報を発信する雑誌ができたことが好意的に述べられている。例えば渥美は、京都は「文学宗教美術工芸の上に向て特異霊淑の気を発揚」しているにも関わらず、「その文学の一部なる雑誌の事業」については現時点で見るべきものがないことを残念に思っているとし、「幸なる哉中西君この平安の都に於て経世博議なる雑誌を発刊せられんとす」ことを喜ぶとしている。

また藤島も、新聞雑誌は「天下の世論を刺激し社会の風潮を進退し得べき」ところの「文明の利器」であるとしながら、その多くは東京において出されており、「殊に雑誌に至りては東京の地を除て発行するところのものは社会に向て其勢力を有する能はず」と述べる。それ故に、中西が「今回京都に於て堅牢なる一大甲鉄艦即ち経世博議を新造して以て彼の東京に雄飛する国民日本の二大甲鉄艦と勝敗を争はんとす其勇気甚だ喜ぶべきなり」として、京都から発信することを好意的に評している。なお、仮想の競合相手として『国民之友』と『日

本人』のような総合雑誌――狭い意味での宗教雑誌ではない――が置かれているのも興味深い。

第二に、もちろん祝詞であることから割り引いて考える必要があるにせよ、中西の文才について、積極的な評価がなされている。例えば藤島は「爰に余友中西牛郎君は才雲漢を傾け学漢洋を兼ね筆は椽大の如く識は六合を包み実に文壇の新将軍なり」とし、また服部も、雑誌が粗製濫造的に数多く出されている状況を批判的に述べながら、「此の艱難の時期なるをも顧みず平安の地にて経世博議なる雑誌を発行せんとするの士あり士を誰とかする近来文壇若手の一大将とて其名都鄙に嘖々たる中西牛郎君なり」として、中西が出す『経世博議』に一定の期待を示している。

いずれにせよ、仏教界から期待が寄せられていたことは前提として、しかし『経世博議』は狭い意味での宗教雑誌あるいは仏教雑誌として構想され、創刊されたわけではなく、総合雑誌としてのあり方が期待されていたことを窺うことができる。これを踏まえた上で、次に寄稿者や論説を見ていきたい。

2.4. 社説について

表１に24号分の社説36本の題目一覧を示したが、政論、時事評論、文明論、宗教論（仏教論、キリスト教論）などが掲載されているのを見て取ることができるだろう。

表１　『経世博議』社説題目一覧

号数	題名（著者：空欄の場合は無記名）	概要
１号	東洋の命運	文明論
１号	同志社の創立者新島襄氏	宗教論／キリスト教論
２号	個人主義の禍害	時事評論
３号	日本政界の一大転機既に眼前に逼れリ	政論
３号	日本の基督教	宗教論／キリスト教論
４号	東西本願寺	宗教論／仏教論
５号	勳閥内閣は曷んぞ最後の一大決戦をなして舞台を退かざる耶	政論
６号	東洋学問の価値	自分名論
７号	亜細亜之光（中西牛郎）	宗教論／仏教論
８号	国民主義の本領焉くにか在る	政論
９号	仏教及其僧侶	宗教論／仏教論
10号	京都人士	時事評論
11号	京都市民	時事評論
12号	黒幕内閣とは夫れ何者ぞ	政論
13号	大に民党の為に惜む	政論
14号	日本仏教が一歩を進むるは斯時に在り	宗教論／仏教論
15号	文学寮の新築	宗教論／仏教論
16号	第三期帝国議会は感情議会たらざらん事を切望す	政論
17号	内閣諸公に望告す（櫻雲房主人）	政論

17号	民党議員に望告す（櫻雲房主人）	政論
17号	独立議員に望告す（櫻雲房主人）	政論
17号	合せて政府民党及び独立議員に望告す（櫻雲房主人）	政論
18号	政府の主義。革新。英断	政論
19号	時勢慨言	政論
20号	功臣内閣	政論
20号	妥当政略	政論
20号	行政革新	政論
20号	後進誘掖	時事評論
20号	北垣国道氏	時事評論
21号	国民協会に告ぐ	政論
21号	「ユニテリアン」恐れざる可らず	宗教論／キリスト教論／仏教論
22号	仏教の最も畏るべきものは夫れ内地雑居にある歟	宗教論／キリスト教論／仏教論
22号	京鶴鉄道論	時事評論
23号	基督教反動の将に来らんとす（岩尾昌弘）	宗教論／キリスト教論
23号	奈破崙第一世を論ず（蘇岳居士）	人物論（ナポレオン）
24号	仏教前途の事業	宗教論／仏教論

政論について、例えば1892（明治25）年５月20日発行の17号に、薩摩出身の政治家である中井弘（＝櫻洲山人＝櫻雲房主人）［1839～1894］が、「内閣諸公に望告す」「民党議員に望告す」「独立議員に望告す」「合せて政府民党及び独立議員に望告す」を寄せているが、これは同年５月６日に第３回帝国議会が開会されたのに合わせての論説であった。この議会は、第二次松方正義内閣下での解散と総選挙を経て開かれたものであり、議会運営に混乱があることが予想されていた。中井は、君主主義と民主主義を比べて、日本において政治は天皇の信任の下に行われるべきものであり、必ずしも議会に従う必要は無いという主張を明確に打ち出している。この論説に典型的に見られるように、当時の日本の政治状況を具体的に参照し、これに対してしばしば国権主義的・国粋主義的立場から論じる論説が多い。

宗教論については、キリスト教批判論、仏教改良論などが掲載されている。それらの多くは東西文明論を基調として「東洋」を称揚する論説であり、そこで日本という国家の果たす役割が強調されることになる。

例えば４号の「東西本願寺」において、まず欧州の強国は、外形的なものを統一する政権と、精神的なものを統一する教権が、共に協力しながら東洋に進出し、勢力を伸ばしているという状況認識を示し[16]、逆にいえば「教権の強弱は、大に其国運の盛衰に関係あるもの」（３頁）であるとする。これを日本に即して考えると、本来ならば天皇が政教二権の長となることができれば良いのであるが、これは憲法に「政教二権分離の大義」が述べられているために不可能であるとする。そこで、帝室ではなく、仏教各宗、特に人々から支持されている東西本願寺が「教」として積極的に「政」を支えていくべきであると論じている。ここで宗教的なものが、主として「国運」という観点から論じられていることになるが、むしろ「国運」

と「教」の不可分性が議論の出発点となっているのを見て取ることができるだろう。

なお、この論説は、現状の東西本願寺に対する改良の訴え、すなわち日本の「教」を担うにたるような組織として自ら進んで変わっていかなくてはならないという主張につなげられているが、これは中西の仏教改良論において、仏教の本来的なあり方を掲げ、それに沿うように現状の仏教を改良していくべきこと述べるという論理がしばしば用いられているのと、並行するものと考えることができる。

また９号の「仏教及其僧侶」では、仏教が日本社会において感化力と影響力を持っていると見積もった上で、例えば「日本貧富の不平等、不調和を救」ったり、あるいは「社会の調和を保」つことによって、社会の秩序を乱す「社会党や、虚無党」の勃興を防ぐことができるとする。

しかし同時に、仏教の現状について「我邦仏教三百年間封建制度と倶に眠れり、進歩運転の機関は其作用を止めたり」とし、今のままではそうした感化力と影響力を十分に発揮することができないとする。具体的に大洲鉄然（本願寺派）と渥美契縁（大谷派）――前述のように創刊号に祝詞を寄せていた――の名前を挙げて、東西両本願寺の当路者の動きを「保守にありて進取にあらず」と評して時代に逆行するものであるとし、他方で仏教公認教運動や被選挙権運動、あるいは龍華空音（大谷派）や北畠道龍（本願寺派）の改革運動をあげて、これらは不十分であるとする。中西（無記名の社説であるが、内容的に中西の手になるものと考えられる）は、「宗教の改革は信仰に基くにあらざれば不可」（４頁）であり、財政や組織の問題に焦点を合わせるのではなく、「信仰の条目」に言及したり、あるいは「仏陀の権威」によるものでなくてはならないと論じるのである。

このように、現状の仏教に対して、信仰に基づく真の改革が必要であるという主張がなされており、これはこの時期の中西の「新仏教」の議論に重なるものであるが、そもそも議論の出発点として宗教の国家社会に対する有用性が置かれてることをも見て取ることができる。

2.5.寄稿者たち

表２に『経世博議』における寄稿者一覧を示す。

表２　『経世博議』寄稿者一覧［寄稿者名　寄稿本数］

繍玄禅	9	大内青巒	6	井手三郎	4
辻治之	9	若葉亭主人	5	井上毅	3
中西牛郎	8	小中村義象	5	稲垣満次郎	3
佐々木勢州	8	藤島了穏	5	吉谷覚寿	3
秋山銀二郎	7	徳永満之	5	国友重章	3
服部宇之吉	7	漫録子	5	寺師宗徳	3
鴨涯居士	6	古賀龍巻	4	松山緑陰	3
久松定弘	6	南条文雄	4	松村翠濤	3
釈宗演	6	中井弘	4	中西元治郎	3

中川重麗	3
堀内静宇	3
無字庵主人	3
膽岳主人	3
諷叢子	3
渥美契縁	2
井上円了	2
井上哲次郎	2
霞城山人	2
獅子吼窟主人	2
舜水漁郎	2
赤松連城	2
前田慧雲	2
大藪良哲	2
辰巳小次郎	2
中川太郎（訳）	2
博議生	2
眉山人	2
北山樵夫	2
龍崎脩	2
鈴木券太郎	2
欸冬佐藤	2

寄稿１回
SY生、つらにく撰、依田学海、稲葉昌丸、越州散人、加藤熊一郎、鶴仙、岩尾昌弘、桐蔭居士、琴浦居士、芹涯子、金守紫東、九州生、健堂嵒男、原口針水、古賀富次郎、孤嘯子、湖山小野長愿、高崎正風、佐々亮郷、混沌子、神田生、蹇諤生、残月庵主人、自由党の有志、小野長愿、小林端一、神水山人、清野勉、蘇岳居士、村上専精、大島貞益、沢柳政太郎、谷鉄臣、鳥居素川、直得子、坪谷善四郎、鉄枷逸士、天仙子、天台道士、土屋寛、東山の仙人（訳）、磯谷幸次郎、踏青軒主人（訳）、薄山人、帆足鵬卿、平野法梁、北溟散人、勃庵池邊生、漫遊生、洛陽陰士、洛陽学人、嵐山人、露牛生、咆哮生

このうち、狭義の仏教者としては、釈宗演、大内青巒、藤島了穏、徳永満之、南条文雄、吉谷覚寿、松山緑陰、堀内静宇、渥美契縁、井上円了、赤松連城、前田慧雲など、良く知られている人物が寄稿しているのを見て取ることができる。

他方、熊本あるいは紫溟会人脈に連なる人物として、井上毅、小中村義象、国友重章、井手三郎、鳥居素川らの名前を挙げることができる。

2.6.論説

紙数の関係上網羅的に論じることはできないが、幾つか特筆すべき執筆者と論説を挙げておきたい。

2.6.1. 清沢満之［1863～1903］

清沢満之が徳永名で「学問と宗教との関係」（１号）[17]、「転化の観念」（６、８号）、「調和論」（14号）、「精神的三要」（24号）の４本（５回）の論説を寄稿している。「調和論」以外[18]、『清沢満之全集』に未収録である。

2.6.2. 井上毅［1844～1895］

熊本出身でやはり紫溟会にも関わった井上毅が「国際法と耶蘇教との関係」（７号、1891（明治24）年７月25日）を寄せている。『国会』（1891（明治24）年６月16日～17日）に掲載され、それが『国家学会雑誌』53号（1891（明治24）年７月）にまとめられたものと同内容となる。なお、『経世博議』から更に『明教新誌』2928号（1891（明治24）年８月２日）に転載されている[19]。

2.6.3. 井手三郎［1862～1931］

前述した博議社社員の井手三郎が肥後山人名で「対清意見」（７～９号）を寄せている。これは井手が刊行した『支那現勢論』（興教書院､1891（明治24）年10月５日）の概要である。同書には紫溟会を設立した佐々友房、中西牛郎が序を寄せ、赤松連城が跋を寄せている。ここにも紫溟会人脈と仏教界の結び付きを見て取ることができる。

なお井手は、清は日本と「唇歯輔車の関係」だが西洋諸国が蚕食しつつあるとし、清の書生に訴えて、その改革進歩を行わせたいと論じている。そのためには西洋人ではなく日本人による「支那新聞創設の事業」が必要であると訴えており、後に実際に大陸で漢字新聞を出版することになる。

2.7. 中西の熊本人脈――「国粋党」と「仏教家」

京都に出てきた中西が、熊本の紫溟会人脈とのつながりを保ち続けたことは明らかであるが、熊本・九州の仏教者たちとの交流について補足しておく。

中西が仏教界と関わるようになったのは、郷里熊本における八淵蟠龍（本願寺派僧侶）との交流を通じてであると考えられる。1881（明治14）年に中西は郷里に私塾神水［くわみず］義塾を設立し、父惟覚が漢学を教え、中西は英語とフランス語を講じたというが、やがて八淵が中西に、神水義塾における寺院子弟の受け入れを依頼し、そこから八淵が同塾において仏教を講じるようになったと述べられている[20]。その後中西と八淵の個人的な交流は、中西が文学寮を解職された後も続いたように思われる。

他方で、八淵との友好関係から更に展開して、中西は紫溟会と熊本・九州仏教界[21]の接触点に位置することになった。例えば、中西が京都に出る前、おそらくは1889（明治22）年の早い時期に「熊本有志団」が結成されており、その経緯が以下のように報じられている：

●熊本有志団結会

［前略：熊本は人物を輩出してきており、仏教界を見れば藤岡法真、八淵蟠龍、加藤恵証らがいる］

殊に此頃藤岡氏監事長となり、熊本有志団結会なる者を、組成せられたりと、其趣意を聞くに云く、自治の気力を養ひ、仏教の精神を発揮し、真理と国家に対し、将来大に為す所あらんとすと、且つ国粋党の袖領として、学識に名望に、共に西州に噪はした津田精［ママ］一。中西牛郎の諸氏、亦此会に加盟し、共に同体一致の運動を試みんとすと、抑々政治と宗教と其区画。井然固より相犯す可きに非すと雖とも、其国害を除き公益を謀り、真理を重んし秩序を守るの一点に関し、倶に其趣きを同ふするの日に至りでは、固より政教の畔岸を論するに遑あらず、然らば則ち今や肥後の国粋党と、仏教家が一致団結以て、為法為国の運動を為す者、是れ其意気の相投したる者と謂つへきか、嗚呼此国にして此人あり、此人にして此事を企つ、我仏教の隆運亦期して侍へきなり[22]。

この記事では、政治と宗教にはそれぞれの領分､「区画」があることを前提として、しかしそれでも「其国害を除き公益を謀り、真理を重んし秩序を守るの一点」についていうならば両者は共通しており、またそうであるが故に「国粋党」と「仏教家」は「為法為国」の運動を一致団結して行うことができるとされている。

同じ記事で、おそらくは紫溟会での言論活動を念頭に置いて、中西は「国粋党の袖領として、学識に名望に、共に西州に噪はした」者として述べられており、熊本有志団は熊本の「国粋党」と「仏教家」が一致団結して結団したものと述べられていることになる。

九州の仏教界については、更に1890（明治23）年６月に九州仏教団が設立され、その機関誌として同年９月創刊された『國教』において、当初中西は主筆を務めることになる[23]。また、京都在住の九州出身者で仏教に関わりを持つ者たちによって、1890（明治23）年12月に京都において九州仏教倶楽部が設立され、1891（明治24）年11月には大阪支部も開設されることになる。同倶楽部の設立にあたって中西は中心的な役割を果たし、更に前述の井手三郎も関わっていた。同倶楽部は機関誌『九州仏教軍』を1891（明治24）年７月に創刊するが、中西はここでも主筆を務めている。『経世博議』の方でも13号（1892（明治25）年１月21日）に「九州仏教倶楽部の希望」という年初に同倶楽部の発展を願う時評が掲載されており、また同号には「九州各県仏教僧侶及信徒諸君」に対して、九州出身者で京都遊学中の者に周旋をするので、父兄からの連絡を乞う旨述べる広告が、九州仏教倶楽部の名義で出されている。

この九州仏教倶楽部に関わっていた人物について、『明教新誌』に以下のような記事がある：

●九州仏教倶楽部　九州出身の本派僧俗より成立ちたる九州仏教倶楽部は現今仮本部を京都堀川本願寺前へ置き支部を大坂土佐堀に設け一方には会員の加入を募り一面には今後の方針に関し種々計画しつゝあることなるが目下会員の加入日に増し加はり賛成者特別会員には細川護美子、西郷伯、品川子、中井弘、古荘嘉門、佐々友房、香川［ママ］恕経、頭山満等あり緇門の有力者には藤岡法真、秦法勵、合志諦定、佐々木雲嶺、立花超道、大財芳達等其他鹿児島造士館教職員等にして殊に熊本県下の財産家有力家の加入已に八百余名あり大分佐賀日向大隅筑前筑後の僧俗追々加入する者又少なからず［以下略］[24]

ここでも細川（長岡）護美はじめ政界の有力者たちと、藤岡法真はじめ仏教界の人士の名前が挙げられているが、両者共に九州との結び付きがあることは前提として、特に前者について紫溟会の中心人物であった古荘嘉門と佐々友房の名前があり、また福岡玄洋社の頭山満と香月恕経の名前も挙げられているのを見て取ることができる。

本節では、中西牛郎が上京して同誌を刊行する前の熊本時代において既に「国粋党」と「仏教家」が結びついていた面があること、またその結び付きが京都に出てからも継続しており、更にその「国粋党」の側が薩摩の中井弘や福岡の玄洋社などをも含むような形で展開していたことを確認した。冒頭で述べたように『経世博議』の特徴の一つは政論と宗教論が併存していた点にあるが、それはそもそも「国粋家」と「仏教家」の間に協力関係があったという状況において成立していたものであったのである。

３．おわりに：もう一つの熊本バンド？

このように『経世博議』は、明らかに中西牛郎の熊本・九州人脈の上に成立しており、当時の熊本、九州、そして京都における「国粋党」と「仏教家」の結び付きを可視化させている面を持っている。

この時期中西牛郎が唱導した「新仏教」が、同時代の仏教青年たちに大きな影響を与えたことは既に指摘されてきた通りであるが、同時にそれは中西自身が紫溟会に関わっていたよ

うに、「国粋党」との結び付きを前提として行われていたのであった。

更に言えば、単に中西個人において政治、あるいは国家を論じることと、宗教を論じることが不可分であったというだけではなく、熊本有志団がそうであったように「為法為国」のために共同することのできる「国粋党」と「仏教家」が、中西の周辺にいたということでもあった。

近代日本宗教史における熊本と京都の関係といえば、熊本洋学校から京都の同志社に転じた海老名弾正や徳富蘇峰らの、いわゆる「熊本バンド」がよく知られており、これについてはキリスト教と、例えば徳富がこの時期平民主義を首唱していたように、より自由主義的な、少なくとも国権主義的ではない政治思想的な立場が結び付いていたと概観することができる。

これに対して、本解題で確認したように『経世博議』は、当時京都にあった中西牛郎の周辺に、あえて問題提起的にいえば、もう一つの熊本バンドとでもいえるような、「国粋党」と「仏教家」の結び付いた集団があったことを示唆しているように思われる[25]。

注

1　中西牛郎（うしろう）は1859（安政６）年に熊本藩の漢学者、中西惟覚の長男として生まれた。熊本で漢籍を学び、東京・長崎に遊学。郷里で私塾神水義塾を開き、後述するように紫溟会に関わる。八淵蟠龍（本願寺派僧侶、熊本出身）とも知遇を得て、仏教について学ぶ。また熊本人脈で京都に出て同志社で洋学とキリスト教を学ぶ。

1889（明治22）年頃、『宗教革命論』の草稿が評価され、浄土真宗本願寺派門主大谷光尊に引き合わされ、同派から資金援助を受けて半年ほど米国に遊学する。帰国後、1890（明治23）年10月に、招聘されて同派文学寮の教頭となる。

この時期、『宗教革命論』（1889）、『組織仏教論』（1890）、『新仏教論』（1892）などを相次いで刊行し、比較宗教･宗教進化論的な枠組を用いて「新仏教」を論じて、同時代の仏教改良運動に影響を与える。『経世博議』（1890～1892）の主筆を務めたのはこの時期になる。しかし、1892（明治25）年７月、保守派からの批判もあり、文学寮教頭の座を解職される。その後もしばらく仏教関係の著作があるが、同派との関わりはほぼ見られなくなる。

その後ユニテリアンに一時期関わり、真宗大谷派にて白河党批判を行い（『厳護法城』（1897））、天理教の経典を編纂するために招聘される（1899頃）。また後に台湾に渡って、台湾同化会の設立に関わり、帰国して扶桑教に関わったとされる。最晩年には天理教に戻ったとされ、1930年に死去。墓は天理教の豊田山墓地にある。

2　本稿で解題を行う『経世博議』という雑誌そのものについては、2009年度から2010年度にかけて遂行した科研若手（Ｂ）「中西牛郎の基礎的研究」（課題番号：21720023、研究代表者：星野靖二）において、総目次を作成した上で、誌面の画像データを全て電子化した。残念ながら著作権の問題が完全に処理されたわけではないためオンラインでの公開はしていないが、問い合わせに応じて電子データの配布を行っている。本解題を通してより多くの方に活用してもらえることを願っている。

3　例えば星野靖二「「新仏教」のゆくえ――中西牛郎を焦点として」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』35号、2018）など参照。

4　「経世博議の理想」『経世博議』１号、1890（明治23）年11月20日。原文は旧字体の漢字カナ混じり文であるが、引用に際して適宜新字体・かなに直している。以下同様。

5　『熊本新聞』1882年２月14日号。

6　「紫溟学会の論陣の中心は津田静一と中西牛郎の二人であり、この二人は『紫溟雑誌』以来、雑誌に新

聞に健筆を振ってきていたのである」（佐々博雄「教育勅語成立期における在野思想の一考察――熊本紫溟会の教育、宗教道徳観を中心として――」『国士舘大学文学部人文学会紀要』20号、1988、p.51）。

7　中西牛郎は1884年に『紫溟新報』上に「宗教及び道義」を連載し、そこで仏教は他でもない「東洋」の宗教であり、かつそれが西洋において一定の広がりを見せているという認識から、積極的な評価を与えていた。

8　佐々博雄「熊本国権党と朝鮮における新聞事業」『国士舘大学文学部人文学会紀要』９号、1977、また佐々弘雄「日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について――熊本国権党系集団の動向を中心として――」『国士舘大学文学部人文学会紀要』27号、1994、参照。

9　紫溟会におけるアジア主義については長野浩典「壬午軍乱と対アジア観：紫溟会を中心として」『大分縣地方史』160号、1996、参照。

10　11号以降、前金が切れた者には請求書を送っているが、支払いがない者に送付することはできないので代金を支払って欲しいと告げる社告が掲載されるようになり、24号には、より強い調子の社告が冒頭に掲げられている。なお、関連して22号に会計担当者である湯瀬季知が辞任した旨の社告がある。

11　未詳。原紙未見。1881年から間に一度廃刊の時期を挟んで1885年まで刊行されていた立憲改進党系の『大阪毎朝新聞』とは別であると考えられる。号外に掲載されている『大阪毎朝新聞』の広告では、発行所は大阪毎朝新聞社、京都支局が経世博議の発行所である博議社とされている。明治新聞雑誌文庫の目録では『新浪華』紙と紐付けられており、他の情報からも両者に何らかのつながりがあったことが想定されるが、詳細は不明。

12　海外宣教会については中西直樹・吉永進一『仏教国際ネットワークの源流――海外宣教会（1888年～1893年）の光と影』三人社、2015、参照。

『経世博議』９号（1891（明治24）年９月25日）に海外宣教会本部の広告が出されており、海外宣教会が刊行している『海外仏教事情』23号のために「仏教国の地図」を作成したが、これを余分に刷って次の新聞雑誌購読者に安価に頒布する旨述べられている：『仏教新運動』、『反省会』［ママ］、『法の園』、『経世博議』、『誠』、『傳燈』、『伝道会』、『浄土教報』、『正法輪』、『四明餘霞』、『能仁新報』、『開明新報』。『経世博議』を含めて、これらの新聞雑誌の読者たちは海外宣教会に近い、あるいは少なくとも海外の仏教の状況について関心を持っていると考えられていたということができるだろう。

13　なお、中西が名古屋の『能仁新報』の主筆に招聘されたという記事があるため（『読売新聞』1890（明治23）年５月６日）、平野が『能仁新報』に関わっていた可能性があるが、未詳。『能仁新報』については川口高風「「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（１）明治二十三年五月～明治二十三年十二月」『愛知学院大学教養部紀要：愛知学院大学論叢』60（２）号、2012に解説がある。

14　中西熊四郎は、1878（明治11）年当時は熊本で牛郎と同居していたという記録があるが、その後松本姓になった経緯は不明である。『熊本県人物誌』「鳥居雪田」項に「明治二十三年十一月には京都にあって「経世博議」という雑誌を編集している」とあるため、松本熊四郎が中西熊四郎であることは確かであろうと思われる。なお、後に鳥居雪田という名前で漢詩人として知られるようになるが、鳥居姓になったのは1901（明治34）年に叔母の家を継いだことによるとある（荒木精之『熊本県人物誌』日本談義社、1959）。熊四郎と『経世博議』との関わりについて、２号に編集に関する連絡は「中西牛郎宅松本熊四郎」に送るようにという社告があり、牛郎と同居して編集に携わっていたことが窺われるが、３号には熊四郎が退社した旨の社告が出されている。なお、熊四郎については藤原正信「明治仏教前史―菊池謙譲の「本願寺破壊」論をめぐって―」『龍谷大学論集』489号、2017も参照。

15　紫溟会と、徳富蘇峰が関わっていた相愛社の関係など、熊本の政治思想・運動をめぐる状況については、新藤東洋男「紫溟会の政治思想――明治10年代の保守主義政党」『法政史学』15号、1962、参照。

16　「彼の欧洲強国なるものは、盡く其政教二権を以て左右両翼となし、以て我が東洋に臨み、教権以て其精神を統一し、政権以て其形体を統一し、二大権力相合して進む、其勢恰も疾風激電の如し」３頁。

17　この論説の内容については、星野靖二「清沢満之の「信」――同時代的視点から」『清沢満之と近代日本』

法蔵館、2016において検討した。

18　西本祐攝氏より、『経世博議』14号（1892（明治25）年２月20日）に「調和論」が掲載されていることにより、従来執筆時期とされていた1895（明治28）年１月から初出が３年程遡る旨ご教示頂いた。

19　この論文で井上毅は「西洋の国際法学において、東洋各国が西洋諸国と対等な条約を結ぶための材料が「宗教の異同」から「其ノ国ノ文明ノ程度」へと変化しつつあること、つまり「新しい「国際法的意味の国家」の概念」が従来の「キリスト教国」から「文明国」へと移行しつつあることを断言」したという（齋藤智朗「井上毅の「国際法ト耶蘇教トノ関係」：非西洋・非キリスト教国日本の「文明国」化への模索」『井上毅と宗教――明治国家形成と世俗主義』弘文堂、2006）。

20　佐々木憲徳『八淵蟠龍伝――明治教界の大伝道者』百華苑、1968、参照。

21　当時の熊本・九州の仏教界については中西直樹が考察を加えている（中西直樹「明治期九州真宗の一断面――通仏教的結束から世界的運動へ」『仏教国際ネットワークの源流：海外宣教会（1888年～1893年）の光と影』三人社、2015）。それによると、熊本の浄土真宗本願寺派には近世の三業惑乱の影響があり、三業派からの展開という面のある法住教社に関わっていた八淵蟠龍と、三業派を異端としていた聞信派からの展開という面のある酬恩社に関わっていた藤岡法真の間に、もともとは対抗関係があったとされるが、1880年代末には両者は協力関係を結ぶようになっていたという。なお、よく知られているように八淵は1893（明治26）年にシカゴで開催された万国宗教者会議に出席することになるが、これは熊本・九州仏教界からの支援によるものであった。

22　『伝道会雑誌』９号、1889（明治22）年２月。

23　『國教』については復刻版が出ており、中西直樹が解説を付している（『雑誌『國教』と九州真宗（解題・総目次・索引）』不二出版、2016）。

24　『明教新誌』3169号、1892（明治25）年12月18日。

25　同志社の熊本バンドについてはそのナショナルな、国家主義的な性格が指摘されることもある。いわゆる「新神学」として語られる日本における自由主義神学の展開と国粋主義の結び付き、また後の日本組合教会による植民地布教などと紫溟会から引き出されるアジア主義・大陸活動などを同一の視野に入れて考えるならば、問題提起として述べた、一見対照的に見える二つの熊本バンドに、むしろ重なる面もあるように思われる。これについては今後の検討課題としたい。